



家に帰ると、母が莞爾して待っていた。

「お帰り」

言うので答える。

「只今」

「文香ちゃん、文香ちゃん、ちよつとこれ見てよ」

居間の椅子に座らされる。机には種々の資料が広がっていた。

「まだちよつと早いんだけどね、お母さん色々調べて見たの。いい高校って本当にたくさんあるのよ。ほら、今は情報公開とかもされてるから、授業内容とか教育方針なんかに共感して行くのが当り前みたい。まずここだけど、この学校はね」

文香は真剣に聞き、頷突いた。しかし、文武両道や、奉仕の心、自主独立の精神など、分らない、具體的な想像ができない言葉に中ると、悩んだ。母は悩む文香に頓着なく説明を進めていく。

「この高校の写真、ほら見て。生徒みんなが楽しそう。行事もいっぱいあるみたい、文香歌々の好きでしょ？ 合唱コンクールとか文化系の行事に特に力入ってるみたいね。とても伝統のある高校で」

「写真」

母が言うので写真を見た。沢山の生徒が笑っている。

「写真、写真の、見えない所」

母は文香の言葉を待った。

「見えない所でも、みんな、笑っているのかな」

「文香。大丈夫よ、みんな笑ってる。それに、文香も、この中に這入れればいいのよ。自分から楽しいことに飛び込むの。自分から笑うの。そうすれば、吃度、大丈夫」

文香は母が悲しそうに笑うのをじっと見た。

塾の時間だった。文香はそのことを知っていた。教室の中を想像すると、沢山の生徒が並んでいて講師の話しを謹聴している。ノートを這う鉛筆の音が響く。不愉快な其音は文香の頭を這う。

其中には多恵もいた。多恵はじつと耳を傾むけ、手を動かす。多恵は講師を熱心に見る。

文香は川のそばにあるベンチに座っていた。もう日は落ちた。等間隔に置かれた街灯が夜を照らす。川沿いの道はジョギングする人も多くあり人通りは絶えない。文香は自分の腕を抱き、項垂れた。長い黒髪がさらりと流れる。

川を見ていたかった。川は暗くて見えない。然し川を見ていたかった。幅の広い川は、静やかで、時折魚の跳ねる音がする。

「みいちちゃん」

声のした方を向くと、多恵がいた。

「たえちゃん」

「やっぱり、ここにいたんだね。塾、来てなかったから」

「私」

「ううん、いいんだよ。となり、座るね」

二人は黙って座った。夜は美しく、暗いのに、川の対いに広がる建物の明りが夜を乱す。汚す、文香は抵抗したかった。壊したかった。歌い出そうとすると、多恵が喋舌った。

「今日も、諸星先生かっこ好かったよ。諸星先生の授業すごくわかりやすくて、面白いよね。私、授業の後、質問しに行こうと思っただけ、又真実ちゃん達がわらわら集ってき、聞けなかった。みんなの先生なのに、勘違いしてるんだよね。『先生彼女いるんでしょ』って今日も聞いてたよ。先生はぐらかしてたけど迷惑そうだったな。みいちちゃんも、塾来なよ。私一人じゃさみしい」

「私、は」

文香はうまく喋舌れなかった。塾に行かなかったことが母にばれたら、悲しい顔をするだろう。夫は分っていた。

「いや。いやに、なるの。行く所を想像すると。並んでる、自分

を想像すると。だから、足が、動かなくて、ごめん」

「うん、その気もち、分るよ。私も行く前凄く嫌だなあって思うもん。でも、行って見るとね、諸星先生もいるし、結構早く時間すぎちゃうよ。あんまり何回も行かないと勉強遅れちゃうしさ、じゃあ、次は一回、一回だけ行こうよ。一所にさ」

文香は頷突いた。多恵が優しい気もちで左右言ってくれることも、分っていた。自分がさみしい気もちと、優しい気もち、どっちが大きいだろう。想像して文香は夜に埋れたくなかった。

#### 四

文香は旨く喋舌ることができなかった。考えたことが、頭の中を駆け巡るので、夫を攫むことができなかった。攫めないのです、舌へ届けることができなかつた。

男子は其事を嘲弄つた。

「わた、私は」

一人が文香の真似をしどつと笑う。クラス全体が笑っていた。文香は目を俯せ耐えた。言い返す言葉は身を潜めた。

教室にいる、一人、一人が、黒い布を纏っている様だった。教室全體にさえ、黒い幕が掛けられている様に見えた。夜とは違う黒い色。美しくしさの感じられない、醜くい色。

文香は黒の世界から逃げた。走る。チャイムが聞える。次の授業が始まる。教室を出る前に、瞬間見えた、多恵が浮ぶ。多恵は自分の席に座り、申し訳なさそうな、悲しそうな目で逃げる文香を見た。ごめんね、ごめんね、文香は多恵に詫まった。もしかすると、声に出ていたかもしれない。呼吸が乱れる。

痩せ細った文香は体力がなくなすぐ走れなくなった。昇降口の所で下駄箱に手を突きああああと叫ぶ。叫ぶのに憎しみが出ていかない。黒い気もちが垢汚つく。体力だけが奪われる。声が掛けられた。

「何やってる」

体育教師の増田だった。増田はがっしりしていて背が高く、文香が二人いても足りない位大きい。増田はぎよろりと文香を見た。

「関根、授業始まつてるぞ」

文香は荒れた呼吸で増田を見た。睨む様な目で、暗い燄が消えない。増田は頭を掻いた。

「保健室行くか」

文香は答えなかった。隙があれば、逃げる積りだったが、まず逃げられないだろう。増田は又頭を掻いた。

「行かないなら、教室に連れて行く。わかるか」

文香は頷突いた。大人らしく、増田に蹠がう。廊下を歩いていると、体育の授業で騒ぐ生徒の声が聞えた。耳に障り、埃の様に、心に積る。

増田が教室のドアをノックし、開ける。「関根」文香に這入る様促がす。文香を見留めた担任の長沢は迷惑そうに顔を歪める。

席に着くまでくすくすと笑う声が教室を盈たした。文香は呼吸を静めるため、胸を強く掴んだ。

## 五

歌う、というよりは叫んでいた。自分でも、何と言っているのか分からない。文香は布団を頭まで被り、有らん限りの力で布団を握った。笑う誰かの顔が浮ぶ。笑う誰もの声が響く。打ち消すために、殺すために必死だった。しかし殺されていくのは自分である様に感じた。

文香が歌うのは誰かの歌でなく、自分の歌だった。胸に訪ずれた言葉や抑揚を其儘歌った。歌は醜くく支離滅裂だった。文香はノ―トに詩を書き殴った。

苦しい 苦しい 苦しい

救え救え誰か私を救え  
叫ぶの全部壊れるまで

憎しみや、怖れ、悲しみを、文香は其儘歌った。左右しないと出て行かなかった。なのに、出て行かないのが、ふしぎだった。感情は、出て行って、出て行った端から又生れるのか、出て行かずに留まり続けているのかさえ、分らなかった。

歌は布団の中で、矢張り糸かしか出て行かず、文香を包围した。布団の中の、暗やみ、圧迫感、籠った声は、文香の胸を縮つと締めた。息が苦しかった。空気が足りなかった。だから歌うのに、息苦しさは増した。

世界を切り裂く為に歌っていた。切り裂けば青い空が見えると信じた。叫びはのどを痛め、咳き込んでつばが毀れた。

## 六

雨の音がやんだ。窓を開けると、もう殆んど降っていない。文香はそとへ手をのばした。

文香の室は二階にあり、眺めると、同じような高さの一軒家が立ち並んでいる。時々マンションも見え空を威す。文香の家から川までは歩いて五分程だったが、方角が違うので室からは見えない。夕暮が近かったので、出かけようと思った。階段を下りると、台所にいたらしい母がパタパタと音を立て顔を見せる。

「どうしたの」

莞爾として言う。

「そと、出てくる」

「どこ行くの」

どこという宛もなかったが「川」とだけ答える。

「暗くならない内にね」

母が言うので頷突く。母のように、いつもニコニコしていられた

らと思う。

今日は日曜日だった。小学生が大声で燥然ぎながら馳けていく。一、二、三人。最後の男の子は足が遅いのか、随分遅れていた。自分が小学生だった時のことを思い返す。何も出てこない。「待ってよ」切れぎれに訴える男の子の声が、文香の胸を螫す。

川の両岸は、緑が豊かで、丈の高い草が並ぶ場所もあった。サイクリングロードや、ここからは離れているが野球などのスポーツができる場所もあり、常にある程度の活気がある。川の幅は広く走り幅跳びの選手が飛んでもとても飛び越せないだろう。川に沿っていくつもベンチが据えられており、家のない人達が休んでいることもある。

文香はこの川が好きだった。県境にある此川は、静かで、どこまでも流れていく。いつまでも流れている。川を見ていると時間を忘れた。

小さな声で歌っていた。川を見ながらだと、穏かな気分で歌えることが多かった。雨上がりの川は、草木は、美しくかった。輝やっていた。文香の頭は美しくいもので盈たされた。

「すごい、上手」

声に驚ろくと、女の子が目を丸くしていた。文香の中学の制服を着ていた。

## 七

目が大きく、鼻筋が通って、顔の小さい女の子だった。長い髪を、右と左それぞれで束ねており、色は明るい。手を口に中てて大袈裟に披いていた。

「歌、上手ですね」

言うとはと隣に座った。背は余り高くないが、指も、腕も、脚も長く、笑った顔はともかわいらしい。文香は戸惑った。

「どこかで、歌習ってるんですか」

文香は首を振った。

「うう、ん」

「あ、そうなんですか。私、ピアノ習ってるんでうまいとか下手とか結構分るんですよ。友達とカラオケ行って、声だけよくてチャホヤされてる子見ると、『音外れてるよ!』とか思っちゃうんですよねえ、あ今関係ないか。私、第一中学なんですけど、失礼ですけど中学生ですか」

「私も、第一中学」

「え! 何年生?」

「二年」

「じゃあ先輩じゃないですか! 私、一年二組の樋口空亜空とい  
います。よろしくお願いします」

突然頭を下げるので、慌てて文香も下げる。相手は不思議そうな顔をしていた。

「あの、お名前聞いても?」

「あ、私、関根、文香。よろしく、お願いします」

「はい、よろしくお願いします。そうかあ、先輩だったんだ。なんか嬉しい」

無邪気に笑う空亜空は美しくしかった。笑顔に打たれる一方で、文香は戸惑っててもいた。まず、他人に是程突然距離を詰められた経験がなかったし、歌のことをほめられた経験もなかった。文香は赧れるというより、戸惑った。

「よく、ここ来るんですか」

「うん」

「そっか、私も時々来るんですけど、気付かなかったな。と言っても、私中学校から此地引越して来たんですけどね。先輩は昔から此地ですか」

「うん」

「そうかそうか、いいことを聞いた。じゃあ、今度案内して下さいよ。学校で会ったら仲好くして下さいね。またここ来てもいいで

すか？」

「うん」

「やった！　じゃあ文香さん、握手々々」

怯々々と手を差し出すと、空亜空は激しく上下に振った。笑いながら手を振って去って行ったが、夕日を浴びて輝やく空亜空が、しばらく文香の目の中に残った。

八

「せんせ」

多恵が弾んだ声を出す。「はい」室の奥から声が聞える。ついで物と物とが打衝った音がする。

「あいたつ」

声が聞えて多恵が大きく笑い出す。文香の位地からでは多恵で隠れて何が起ったのか分らなかった。

「あいたたたた」

春江先生が膝を擦りながら笑って出てきた。

「もーたえちゃんが突如呼ぶから打衝かっちゃったわよ」

「私のせいじゃないですよー」

多恵がケラケラと笑う。二人は音楽室に来ていた。

きょうは是非にも塾へ行こうと多恵が誘うので、文香は頷突いた。

但塾までにはまだ間があった。すると音楽室に行つて春江先生と話してしようと多恵が提案をした。

音楽を教えている春江先生は、めがねをかけていて、ふくよかな身軀をしている。身軀通りおっとりしていて、内気な多恵も春江先生には心を許しているようで朗らかに笑っていた。

音楽室にはいくつも小部屋があり、三人は其内の一つへ這入った。

「何、今日はまた塾？」

「はい、そうです」

「塾の前だけじゃなくて、部活の日にちゃんと来なさいよ。あな

たも合唱部員なんだから」

「へへへ」

多恵は笑ってごまかす。「ね」と文香を捲き込むので、取り敢ず  
額突く。

「文香ちゃんからも言ってお上げてよ。週に二、三回ある内、全部  
来ることなんて滅多にないんだから」

「そんなことないけどなあ。ねえ、みいちゃんも合唱部入ろうよ。

左したら私毎回来るよ」

「あら、部員が増えるのは私も嬉しいけど」

話しの矛先が突然自分に向いたので文香は驚ろく。「わたし、私」  
反吐戻と答える。

「冗談よ。気にしないで文香ちゃん。突然ごめんね」

「そうそう、みいちゃんごめんね。あ、そうだ先生聞いてよ」

二人が話し始めたので、文香は立ち上がった。室には楽器や楽譜  
が沢山置いてあって、其一つを文香は目繰る。「夕焼け小焼け」が  
のっていた。五時になると流れる其音楽を思い出す。文香は歌った。

夕焼け小焼けで 日が暮れて

山のお寺の 鐘が鳴る

おててつないで みなかえろう

からすといっしよに かえりましょ

納得がいくまで、くり返して歌った。いつまで経っても、納得は  
いかなかった。狭い此室には狭い窓がある。唯さえ狭い其窓は、置  
かれた楽器によって更に狭められている。どこかへ帰る歌。帰れな  
い狭い室。だから納得がいかないのか考えた。

慣れた二人は文香に頓着せず喋舌り合っていた。文香が歌うの  
をやめ、話しに一段落が着くと、

「文香ちゃんは、歌うのが好きなのね。そのことだけは分るわ」  
と言って春江先生が笑みを向けた。

少し呼吸をすると、心が落ちついた。空は青く晴れている。まばらに浮ぶ雲が美しい。

文香は駅のホームで空を見上げていた。母と買い物へいく。もう夏が近いから、服買いに行きましようと言ってくれた。文香は服が好きだった。すてきと思う洋服に出会えるときどきした。

電車は夫程込んでいなかった。母と並んで座り揺られる。文香はどこことなくおち着かず右顧左眊した。右にも左にも人がいる。大きい人、小さい人、若い人、年配の人、色んな人が座り立っていた。太陽が眩しくて目を細める。

対いに座っていたお兄さんが立ち上り、目の前のお姉さんにごと身振りで席を譲る。お姉さんは「ありがとうございます」と恥しそうに席に座る。かばんにマタニティマークがついていて妊婦さんだと分る。お兄さんは茫然ともせず会釈だけして別の車両に移っていた。

「あのお兄さん、髪は真っ赤で派手だけど、偉いわね」  
じっと凝視していた文香に気づいた母が言う。

「すてきね」

母が笑うので文香は首が折れそうな勢いで何度も頷突いた。心に暖たかな水が湧く。身体にも日が当り暖たかになる。

駅が近付く。はしゃいだ文香は電車のドアに貼り付き開くのを待つ。本当にいい天気だった。後ろにいる母は微笑む。

ドアが開くと、ふくよかなおばさんが突進して来た。文香に打撃かり文香は踉蹌く。母が驚ろいて支えた。おばさんは急いで席に座り「暑い暑い」と汗を拭いた。

降りると当たった右腕を押えた。黧れてもげるかと思った。暖たかな水は黒く染まる。母が右腕をさすってくれる。

駅のホームにはごみ箱が設置されていた。自分と同じくらいの年

の男の子が「シュート」と叫んでごみを投げる。ごみは入らずホームに転がった。一緒にいた男の子達が「へたくそ」と笑ってどこかへ行ってしまふ。

行って仕舞う、どこかへ行ってしまふ、文香はぶつぶつと独語いた。男の子達が見えなくなると、母がごみを拾ってごみ箱へ入れた。文香を見て困ったような、悲しそうな顔で笑う。文香は手を噛んでいた。痛みは何も齎らさなかった。だから強く噛んだ。醜くい儘、どうして生きられる。文香は醜くさのことと、醜くさを憎む強い気もちのことを、言葉にできなかつた。

母が口の中から手を外し、歯の痕がついた手の甲をさすつてくれる。先きと同じ顔で笑んで何も言わない。母の手が糸かな凹凸をなぞり、変らず太陽が輝やく。

電車が通過する轟音が突然響いて文香は惴栗と怯える。

文香はお店でワンピースを試着した。淡い緑の花が沢山絵描かれていて、細っそりとした作りになっている。文香は鏡に映った痩せた手足と、突き出た鎖骨、髪黒と白い肌とをじつと見詰めた。

## 十

文香と多恵は並んで廊下を歩いた。きのう塾へ一緒に行った時、諸星先生と五分程二人で話せたのが余程嬉しかったらしく、多恵はくり返して喜びを語った。文香はすぐ後ろで居心地悪く控えていたから会話の内容も分っていたが、真剣に聞いて頷突くことで合鍵を打った。

「文香さん！」

突然聞えた声に二人は驚ろく。振り向くと空亜空がいた。

「あーやつと会えましたね！ 私、廊下きよろきよろしたりしてよく探してたんですよ、やっぱり学年ごとに階が違うと会わないもんですね。今、どこ行ってたんですか、家庭科？ 私これから理科の実験なんですよーだから三階にいるんですけど。最近川行ってま

すか？ 私あんまり行けてなくてー行った時には文香さん探してるんですけど、見つからなくてさびしい思いしてるんですよ。あごめんなさい私ばかりしゃべっちゃって。えっと、私樋口空亜空と申します。文香さんのお友達ですか？」

多恵は面食らいながら「富川多恵子です」と自分を紹介した。多恵が愛想笑いをするのに、空亜空は満面の笑みを見せた。

「この前、文香さんとお会いしまして、お友達にしてもらいました。どうぞよろしくお願いします。いけないこんな時間！ 引き止めちゃってごめんなさい。実験の準備始めなくちや怒られちゃう。じゃあ文香さん又」

去ろうとするので文香は咄嗟に手を振った。くるりと向いた空亜空がもう一度こちらを向くので文香は更に驚ろいた。

「あ、文香さん明日川行きます？ 私四時頃行くつもりなのでよかったです」

にこっと笑って手を振りながら去って行く。待ってくれていた友達に「ごめんねー」と言っ角を曲がっていく。二人の心臓の鼓動は早まっていた。

「すごい子だね」  
顔を見合せた多恵が言った。

「明るいというか、勢いがすごいというか」

残された二人はまわりに見られている気がしてなんだか恥しさが湧いてきた。時間もなかったので急いで教室へ戻る。道中多恵が独語く。

「ずいぶんきれいな子だね」

なぜか言葉に棘を感じて、文香はチクリと身體を刺された。

## 十一

文香は学校が終り、塾に行くまでの間川にいた。空亜空に言われたからということもある。多恵はどうするかと思ったら言われた。

「私は、いいかな。あの子ちよつと苦手だし。今日は部活出てから行くね」

文香は頷突いた。緩くり歩いて川へ向う。一瞬、「関根さん、テスト落ちてたよ」と言っただけの悪い小テストの答案を渡された時の、クラスメイトのニヤニヤした顔が思い浮ぶが、首を振って打ち消す。落ちていたのではなく、文香が席を離れた時に取られたのだけれど、出来が悪いのは自分のせいだった。

今年の梅雨は雨が少なかった。まだ明けてはいないが、暑いぐらいの気温が続いていた。夏服は嫌いだ。自分の身体が出る。文香は骨張った肘をさすった。

着いた時に空亜空はいなかった。川のすぐそばの、気に入りのベンチに座る。ここの周りは丈の高い草に囲われていて、人目に着きにくい。風が爽やかだった。

空 空 空

風と水と夏

きれい

歌ともいえない歌を、胸に湧く抑揚にのせて歌う。人のことを考えなければ、きれいな歌が歌えた。人のことを考えると、醜く汚ない歌になった。

「文香さん！」

歌い歇めた瞬間、後ろから抱き付かれた。驚ろきすぎて、恐らく一瞬は心臓がとまっただろう。ぜいぜいと息を荒らげて振り返る。

「来てくれたんですね」

空亜空がちよこんと隣りに座る。呼吸が収まらないので前屈みで空亜空を見上げる。「ごめんなさいそんなに驚ろくとは」今更空亜空が慌て出した。

一呼吸おいて、おち着くと、二人は黙って座った。風が少し強いので、夫々髪を押える。水面の光りの反射を、二人で見守る。

「私」

空亜空が静かに言う。

「引越す時、小学校の友達と離れるのが嫌で嫌で泣き叫んでたんですよ。中学生になんかなりたくないって思ってたました。でもこの町に来て、この川を見たら、そういうの全部消えちゃったんですよ。消えたというか、なくなってはいないと思いますけど、凄く好きになっちゃったんです。この川があって良かった」

きのうと違って穏やかに笑う空亜空は美しくしかった。

## 十二

「文香さん、さっき歌ってたのとか、この前歌ってたの、誰の歌なんですか」

訊かれて文香は戸惑った。歌が誰のものかを考えたことがなかった。

「てきとう」

「適當？ え、誰かの歌じゃないんですか？」

文香は頷突いた。

「へえ、ああ、そうかあ。え、そうなんですか？ ピアノとか習ってます？」

文香は首を振った。

「え、夫って凄いですよ。何で曲作れるんですか？ 何曲ぐらい今まで作ってますか」

「曲、は、作ってないよ。よく、わからないから」

「へえ、ああ、そうなんですか……」

空亜空は要領を得ていない様だったが、文香も同じだった。二人でふしぎそうな顔をするので、二人で吹き出した。

「文香さん、先きの歌々って下さいよ。すごくいい歌でしたよ」

文香はさみしく笑って首を振った。

「私、うまくないよ。歌、ほめられたことないし」

「そんなことないです。うまいっていうか、魂？ 魂が込められてるっていうんですかね。この川と一所いっしょですよ！ 私、文香ふみかさんの歌のこと好きになったんです」

左右そう言われると何だかむず痒がゆいような気がした。川と一所いっしょにしてくれることを、すなおに嬉しいと感じた。息を吸って、しばらく呼吸をととのえた。

代かわりに、夕焼け小焼けを歌った。一分程、短みかく歌った丈だけだったが、風が吹いていることを嬉しく思った。もうすぐ五時になる。どこかへ帰る歌を、さみさと、少しの喜よろこびを込めて歌った。

この前よりは納得ができた。夫それでもまだ足りないので、本当は、喜よろこびの、「また明日」を心待ちに待つ時の歌なんじゃないかと思っ  
た。

空そ重あ空らは小さく拍手しながら不満そうにもしていた。

「文香ふみかさんの歌が、聞きたかったんだけどなあ。じゃあもう一曲、聞かせてもらえませんか」

文香ふみかはさみしく首を振った。

「まあ、今日の所はよしとしましょう。すごく素敵すてきでしたよ。むり言ってすみません、ありがとうございます。又また、ここで会いましょうね。ここで会うのが一番いいです」

空そ重あ空らもさみしく笑った。

「本当は、私、学校で会った時みたいな明るい子じゃないんです。小学校の時の友達ともだちが誰もいないから、無理して明るく、笑ってるんです。でも左右そしていると誰も本当の私のこと知ってくれなくて…：文香ふみかさんさんといると、どうしてか分わからないけど自然体でいれます。また、歌、きかせて下さいね」

少し離れたスピーカーが、夕焼け小焼けを流し始めた。

### 十三

男の子達が、上下に重なり、組み合う。砂すなほこり埃あじが濛々もうもうと舞い立ち、

太陽が凡てを照らし焼く。

声援というより怒号だった。男子は力になれよと声を囁らし、女子は奮い立たぬかと勇を操練る。体育祭の一番の見所でもある騎馬戦をしていた。最後は大将同士の一騎打ちになり、観衆は益自陣に勝利を引き寄せ可く声を絞った。

文香は声援の中で声を上げずじつと見ていた。筋肉が蠢めき相手の手を攫む。体勢を崩し一瞬の隙を見て鉢巻を奪わんとする。相手の馬が崩れた。大将は其一瞬で鉢巻を奪う。敵方は地面に強たか背を打った。大将は手を天に掀げ雄叫びを上げる。観衆は鐘の如打たれて応じる。割れんばかりの拍手が起きた。

相手の大将は助け起され友人の肩につかまった。一周回って英姿を誇った自陣の大将は馬から降り、互いに固い握手を交す。又大きな歓声が沸いた。勝者にも敗者にも等しく言葉が降る。力を尽した人らに人は優しい。

文香も手を叩いていたが、アナウンスが次は徒競走と告げると発とした。出場するため一箇所集まる。周囲の興奮は未だ冷めておらず騒々していた。心臓の音が聞える。丸で周囲の騒めきに応ずるように心臓は落着かなかった。

流れる音楽が変わり、スタートの銃声に惴栗とする。なぜ、走れ走れと急かすような音楽を流すのかと思った。次々と銃声が競争を促がし、其度に文香は怯える。呼吸を少し深くした。遠くで母が控えるに手を振っているのが見える。文香の呼吸はもう少し深くなる。

文香が走るのは最終組だったが、程なくして順番が来た。定位置に付く。「よーい」の後の静寂が予想していたよりも深く、戸惑う。銃声が鳴った。驚ろいてすぐ出たが、文香以外の走者は陸上部などの運動が得意な子許りで、一瞬ごとに差が開く。文香は懸命に走った。ゴールに向って走っている筈なのに、背中を追わされている様に感じた。日差が頭を焼いて朦朧とする。

文香は躓ずいて転んだ。

転んだ瞬間、前の人達がゴールしたようで歓声が聞えた。かなり先で、次々にゴールに達するのが見える。「すごい」「惜しい」「よくやった」言葉が文香にまで届く。文香は慌てて立ち上り走った。頭が痺れている。急速に静かになっていくように感じた。音楽ばかりが間抜けに何度もくり返されている。

文香は明らかに遅れていた。転んだ所為ばかりではなく、通常足の速い人を最後に配置するので、足の遅い文香との差は歴然としていた。誰も何も声をかけなかった。学校全体が化物のように見えた。ただ、文香が漸やくゴールに近いた時にだけ、「あーあ」と誰かが独語いた。

ゴールに達すると終了を告げる銃声が二度鳴った。文香は呼吸が儘ならず膝に手を突いた。「文香さん！」静かな中を誰かが飛び出した。空亜空だった。「血」蒼褪めた顔でつぶやく。見ると白い靴下を染めるほど膝から血が流れていた。体育教師の増田が駆けつけて「こりや出てるな」と怪我を見た。文香を負々って保健室へ向う。

「血がつく」文香は切れ切れに増田に言ったが増田は「おう」と要領を得ない返事をした。

少しだけ騒ついていていた観衆はアナウンスに最後のリレーを行う旨を告げられると平時に復した。距離のある保健室まで負ぶわれながら文香は音の変化を聞いた。空亜空は心配そうに跟いてきた。増田はぼそりと「最後までよく走った」と文香をほめた。

文香は増田の広い背中にもたれ、増田のジャージを握って泣いた。空亜空は其背をさすろうとしたが増田の背が高く届かなかった。代りに足にそつとふれた。文香は声をもらさず歯を嚙んで泣いた。

保健室に着くと増田は戻り多恵が駆け込んできた。「みいちゃん」其姿を見ると文香は多恵にすがって激しく泣いた。膝の痛みは感じなかった。只血が流れていた。一通り泣いて落ち着き、先生が処置をしてきている間、指についた血の痕を茫然と見つめた。

「文香ちゃん、今日はよく頑張ったわね」

「……………」

「転んじやった時は、お母さんハラハラして倒れそうだったけど、ちやんと一人で立ち上<sup>あが</sup>って、最後まで走ってとつても偉かった。文香はお母さんの自慢よ。終<sup>おわ</sup>った後、走<sup>お</sup>ってきてくれた子は新しいお友達？ 保健室に迎えに行った時<sup>とき</sup>もいてくれたけど。ソアラちゃん？ そう！ とてもかわいらしい子ね。名前も今時<sup>いま</sup>って感じの名前<sup>なまえ</sup>だけど、そう、新しいお友達<sup>ともだち</sup>できたのね。今度<sup>こんど</sup>多恵<sup>たえ</sup>ちゃんと一<sup>いっしょ</sup>所に連れてきなさいね。おいしいお菓子用意<sup>ようい</sup>して待<sup>まち</sup>ってるから。そうか、文香ちゃんに新しいお友達ができたのね。じゃあ今日はお祝いね。文香ちゃんの好きな料理用意<sup>ようい</sup>するから、楽しみにしててね」

文香は一人川<sup>かわ</sup>へ向<sup>むか</sup>った。時間が経<sup>た</sup>つと、膝<sup>ひざ</sup>の傷<sup>きず</sup>はずきずきと痛み出した。七月の夜はいつも遅い。川<sup>かわ</sup>へ叫<sup>な</sup>んだ。

静寂<sup>しじやく</sup>が私<sup>わたし</sup>を殺<sup>ころ</sup>す

倒<sup>たお</sup>れる私<sup>わたし</sup>を何<sup>なん</sup>度も刺<sup>さ</sup>す

血<sup>ち</sup>が流<sup>なが</sup>れているのが見<sup>み</sup>えないの

血<sup>ち</sup>だけが赤<sup>あか</sup>く流<sup>なが</sup>れる

川<sup>かわ</sup>の向<sup>むか</sup>うのビルにはひびきさえ入<sup>い</sup>らず、夜はまだ来<sup>こ</sup>ない。

## 十五

部屋<sup>へや</sup>から居間<sup>いま</sup>に降りると、父<sup>ちち</sup>がいた。父<sup>ちち</sup>は文香<sup>ふみか</sup>に気づくと新聞から顔を上げ、穏<sup>おだ</sup>やかに笑<sup>わら</sup>う。

「おはよう」

文香も「おはよう」と答<sup>こた</sup>えた。父<sup>ちち</sup>が「文香<sup>ふみか</sup>は休<sup>やす</sup>みの日<sup>ひ</sup>でも早起<sup>おき</sup>きで偉<sup>偉</sup>いな」とほめるので頷<sup>うなず</sup>く。父<sup>ちち</sup>はハハハと笑<sup>わら</sup>った。

めずらしくポロシャツを着ていたので「ゴルフ」と訊くと、「そうだよ」という。

「もう日ざしも強いってのに嫌になっちゃうよ。日射病で倒れちゃうなハハハ」

「暑い」

「梅雨ももうすぐ明けるみたいだね。あ、文香夫が此前転んだ傷か、お母さんから聞いたよ。大きい絆創膏だね。ちゃんと新しいのに変えてる？ こういうのは清潔さが大事だからね、面倒でもちよくちよく張り替えるんだよ。痛みはまだある？ そうか。よしお父さんがチュウして痛みを吸い取ってあげようか。何いらない？ そうか」

「あなた」

台所から母が顔を出す。

「そろそろじゃない」

「ああ、もうこんな時間か。じゃあ、行ってくるよ。夕飯は済ませてくるから。文香、あんまり相手してあげられなくてごめんね、うちみたいな小さい会社だと昼も夜も休みの日もないよ。また、どつか遊園地にも行こうな。じゃあ行ってきます」

「いってらっしゃい」

母と二人で父を見送る。二人で顔を見合わせる。

「ご飯、できてるから食べましょうか」

母がそのままの顔で言う。

## 十六

教室の出入口から、空亜空の顔が覗くのが見えた。目が合うと空亜空の顔が輝やく。

「文香さん」

空亜空は文香の席まで来るとチョココンと蹲んだ。文香の隣にいる多恵にも「こんにちは」とにこやかに挨拶する。

「上級生の教室来るのって緊張しますね。私、ここいても大丈夫ですかね」

「多分大丈夫だと思うけど……どうしたの」

「実はですね、私、今部活探してまして。お二人の部活についてちよつとお聞きしたいなあと。文香さん、何か部活されていますか？」

文香は首を振る。多恵が補足する。

「一年の時に天文部入ってたけど、もうずっと行ってないよね」

「多恵子さんは何かされていますか」

「あ、多恵でいいよ、みんなそう呼ぶし。私は合唱部。私は、一応、まだ通ってます」

「合唱部ですか！ 合唱部ってどんな活動するんですか、週に何回ぐらいやっています」

文香は二人が話すのを、空を見ながら聞いた。青い。余りにも晴れているので、少し雲が欲しいとも思う。昼休みのため人も疎らで、人声が囂すしい。

「じゃあ、合唱部見学に行ってもいいですか。文香さんも行きませんか？」

突然言われて文香は驚ろく。目を丸くした。

「文香さんも、よかったら入りましょうよ。うちの親戚しくて、ちゃんと部活もして勉強もしてきちんとした学生々活を送りなさいとか言うんです、きちんとしたってどういうことなのか教えてもくれないのに」

「空亜空ちゃんは、今まで部活入ってないの」

「バドミントン部なんですよ、籍だけは一応。最初に友達になった子が誘ってくれて入ったんですけど、私運動苦手なんでちよつときついなあと。夫でやめようと思うって親に言ったらいいけど他に何か入りなさいって。私ピアノも習ってるんですけど、ピアノ行って塾行ってその上部活もびっちりやったらもうてんでこ舞いです、くるくるなんです」

空亜空がおどけて目の回る様子を見せるので多恵は笑った。

空亜空も微笑む。

「週に二、三回の活動だったら何とかかなりそう。じゃあ、放課後、よろしくお願ひしますね。文香さんも一緒ですよ、約束ですよ。ではまたお邪魔しますので」

空亜空が手を振って去って行くので二人で手を振った。多恵が笑っている。

「みいちゃん全然喋舌ってないね」

言われて文香は左右言えばと思った。多恵は又笑った。

「でもあの子、いい子だね。話してみ分ったけど」

言われて文香は頷突く。

## 十七

放課後、三人は並んで歩く。多恵が春江先生に話しを通してくれたらしく、多恵は春江先生について話していた。

「私達は一年の時から春江先生が音楽の担当なんだけど、すごくいい先生だよ。生徒の目線で話してくれるっていうか、私も将来先生になりたいんだけど、春江先生みたいな先生になりたいなあって思ってるんだ」

「そうなんですか。大事なことですよね、生徒の目線で話してくれるって。私、小学生の時ですけど、もう明らかに『ガキは大人の言う事聞いてりゃいいんだ』って態度の先生いてもう最悪でした。対等で話してくれないんですよね」

「ああ、小学校だったらそんなもんかもしれないね」

文香はふしぎだった。学校にいれば、いつでも、どこにいても、誰かの声がある。生徒の叫ぶ声。歓声の、雄叫びの、声がある。夫がいつでも文香の神経を刺激する。

音楽室に着くと春江先生が待っていた。「失礼します」と空亜空が快活に挨拶する。

「はい、こんにちは。あなたが樋口さん？」

「はい、樋口空亜空といます」

「今日は、見学でいいのよね？　まだ始まるまで時間あるから、ざっと説明するわね」

春江先生は活動内容などを掻い摘んで説明した。大抵は多恵の説明のくり返しだったが、空亜空は謹しんで聞いた。

「まあ実際に見てもらおうのが一番だと思うけど、ここままで何か質問ある？」

「あの、私、ピアノ習ってるんですが、伴奏の方でもう決めますよね」

「ええ、決ってることは決ってるけど、伴奏できるのね。ああ、そうか、今伴奏やってる子は渋々やってくれてるだけだから、もし、やってくれるなら助かるかも、その子に聞いてみないとわからないけどね。ピアノはどれぐらい？」

「三歳の時から習ってます」

「じゃあ大丈夫かな。ちよっと、聴かせてもらってもいい？　今できる？」

「はい」

空亜空は淑やかに、臆する様子もなくピアノに向った。文香は空亜空をじっと見つめる。

「合唱だったら、合唱の曲弾いた方がいいですよ。一寸楽譜お借りします」

空亜空はパラパラと曲集を目繰り、無雑作に曲を定める。春江先生が横から曲集が閉じない様に押える。空亜空は椅子の高さや位地を調整し、鍵盤に其滑らかな指をのせる。

## 十八

弾いたのは「待ちぼうけ」という曲だった。軽快な曲で、空亜空は滑らかに音を奏でる。文香は踊り出したような気もちになる。想像する。夕日の幻像だ。夕日が射す音楽室。雑音は何も聞えない。

ピアノの音だけがする。文香は躁然いだ。躁然ぐのに声は響かない。想像の中で人の声がしない。

空亜空は一番だけ弾いてやめようとしたが、文香が突如歌い出すので応じて弾き続けた。想像から出ると、夕日も射していない、遠くで、遠くで人の声が微妙にしたが、文香は目を披いて熱心に歌った。ピアノの音との一体感を感じた。文香はやはり踊り出したかったが堪えた。其代りに歌った。腹の奥の動き出したい気もちで歌った。

終ると少し寂とした。夫から、春江先生が拍手する。

「樋口さん上手ね」

夫から多恵も寄って曲集をパラパラと目繰る。

「え、なんで、音符一つずつしか書いてないのに何で両手である風に弾けるの。普通ピアノの楽譜って音符がたてに何個も並んでない？ どうして」

「あ、それはこの上にアルファベットが書いてあるじゃないですか。これコードって言って夫を見て適当に」

「え、意味が分らないすごい、空亜空ちゃんすごいんだね」

文香は呼吸を整のえていた。興奮が収まらない。幸福感が盈ちていた。目を閉じると、まだ夕暮の音楽室に居ることができた。

空亜空は艶のある目で文香を見たが、文香の様子を見て先生へ目を戻した。

「うちにあるのアップライトピアノなんで、やっぱりグラインドピアノだと全然違いますね。ピアノの先生の所で週に一回しか弾く機会ないから楽しい」

「合唱部入ったら空いてる時いつでもどうぞ。でも、これ位弾けたら樋口さんは問題なさそうね。そうか、そしたら文香ちゃん、文香ちゃんも合唱部入ってくれるの？ うん、有難うね、そうしたら前から言おうと思ってただけど、もうちよつと姿勢はこう。そう。下を見ないであごを引いて視線はまっすぐ前を見て。もつと口を大きく開けるの。ほっぺたをこうくいと、こんな風に上げてみ

て。一寸声に表情が乏しくて、安定感が足りないなあと前からは思  
 っててね、でも左右言うのは練習次第だから、大丈夫、これから、  
 二人とも、よろしくね。二人も部員が増えて嬉しい」  
 春江先生の話しを真剣に聞いて、文香は頷突いた。

## 十九

「文香さんの魅力を分かってない！」

空亜空は憤然とした様子で言った。文香も、多恵も、黙っている。  
 学校からの帰り道、三人は並んで歩いた。

「私のピアノで、初めて文香さんが歌ってくれて、嬉しかったの  
 になあ。くっそー声に表情がないだなんて。なんか悔しい。文香さ  
 ん、見返してやりましょうね。そして又私のピアノで歌って下さい」  
 空亜空は熱烈に文香の手を握った。文香は勢いに圧されて怯えな  
 がら頷突く。多恵は不服そうだった。

「私も、みいちちゃんが歌うの好きだけどね、実際みいちちゃんより  
 上手な子は沢山いるし、もっと、何て言うのかな、高い声とか出せ  
 るようになった方がいいと思うの。今の歌手なんかみんな上手じゃ  
 ない。音域広いのが普通だし。夫には、ちゃんと春江先生が注意し  
 てくれたこと受け容れて、上手になるための練習をした方がいいと  
 思うな」

多恵が言うので文香は真剣に聞く。空亜空は何か言いたげだが口  
 には出さなかった。少し陰悪になりかけた所で別れ道が来て、三人  
 は穏やかに別れを告げ合った。

文香は家に帰ると、部屋のベッドに身を投げた。俯伏せになり真  
 剣に聞いた言葉を回想する。つまりあれは、どう歌うか、いかに上  
 手に歌うかのための手段ということだろうか？

文香が歌う時に考えている、感じているのはどこで歌うのかとい  
 う一点についてだった。胸の奥に、歌いたいと叫ぶ場所があつて、

そこから歌が生れる。厄介なことにその場所は移動する。移動するので仲々捕まえない。

真に其場所で歌うことができたことは一度もなかった。今日は、かなり近かったが、矢張り少しずれている。文香は自分が本当に歌いたかった。だから歌を歌った。

言われた歌い方を覚えれば、其場所で歌うことができるだろうか。どこで歌うのかと、どう歌うのかは、全たく懸け離れている気もしたが、分らなかった。文香は疑問を自分の言葉にすることができない儘、考えていたら、いつか眠っていた。

## 二十

合唱部の練習は、まず体操から始まり、発声練習をし、パートごとでの練習を経て全体での練習に移る。体操は腹筋や、背筋、毎回ではないが走ることもあったので、体力のない文香には少し負荷があった。

多恵と文香はアルトというパートになり、空亜空は希望通り伴奏をすることになった。自己紹介をする時も空亜空は明るく振る舞い、文香は訥々と喋舌り、二人は夫々に相応の拍手を受けた。

文香は一人の女の子に話し懸けられた。

「関根さん久しぶりー私、一年の時に一緒だった渡辺なんだけど、覚えてる？」

言われて文香は頷突いた。確かに見覚えがあった。文香が頷突くのみで喋舌らないので、渡辺さんは「よろしくね」と丈挨拶して去った。

多恵はなぜそこで会話を繋がないのかとハラハラしながら見ていたが、余り口を出すのも文香のためにならないと黙っていた。合唱部は全員で十人余りいたが、男子は三人だけなので略女の子だった。

其三人の男子は全員二年生だった。合唱部に這入る男子は是でも

多い方かもと多恵は春江先生から聞いたことがあった。此中の工藤という男子が多恵は苦手だった。

工藤は自分の話ししかなかった。

「ブログを書いている奴は多いみたいだけどな、其ほとんどものに価値はないんだ。なぜかわかるか。大抵はつまらない日常の垂れ流しじゃないか。まあ、俺のブログを見てもらえれば違いが分ると思うけどな」

口調は大袈裟で、嫌味たらしく、同じことをあちこちへ行つて吹聴した。言われて多恵は見てみたが、話と同じ調子の文が平坦に並んでいるだけで、寧ろ他の子より詰らなかつた。絶望と希望という言葉が矢鱈と使われていた。工藤は外見も野暮ったく、女子からも、他の二人の男子からも少しの距離を置かれていた。

工藤は空亜空に話しかけた。

「ふーん、ソアラちゃんっていうのか。いい名前だねえ。まあ分らないことあった何でも俺に訊きに来てよ」

大きい声で笑う工藤に、空亜空は莞然として簡単なお札を一言述べた。

## 二十一

また別の日、空亜空は工藤に話し懸けられた。

「ねえねえ、空亜空ちゃんは彼氏いるの？ って言っても、一年だから彼氏はまだ早いか。好きな人いるの？」

空亜空はにっこりと笑った。

「はい、彼氏います」

工藤は呆けた様に「あっそうなんだ」と言って引き退った。其日の帰り道、三人で帰っていると多恵は言った。

「空亜空ちゃん、今日、彼氏いるって言ってたけど、ほんとにいるの？ 夫とも嘘ついた丈？」

「あ、いることは、います。でも、形丈って感じですよ。同じ

クラスの人ですけど、何か子供っぽくて」

「あ、ほんとにいるんだ：：空亜空ちゃん、かわいいもんね。やっぱりかわいい子は違うんだね」

「かわいくなんか」思いの外強い語調で空亜空は反応した「外見なんて、どうでもよくないですか。中身を、好きになつてくれるから、嬉しいんですよ。形丈彼氏いたって何にもならないです」

「でも、形丈でも彼氏いる子なんて其んなにいないよ。私も左右だし。うらやましいなあとは、思うけど」

別れ道で、立ち止って話している時だったので、もう少し話してみな帰った。文香は空を見ていた。青空に浮ぶ雲が、今日は殊更に美しく見えた。気分が突然昂揚して来て、腕を広げて、回りながら歩いた。歌う。石に躓ずいてバランスを崩し、尻もちをついた。見上げると空は空の儘だった。嬉しくて声を上げて笑った。

「文香さん、大丈夫ですか」

声に振り返ると空亜空がいた。文香は笑顔で頷突いた。

## 二十二

空亜空は文香と話しがしたくて戻ってきたと言った。空亜空は沈んだ表情で

「文香さん、もしよかったら川に行きませんか」

と言った。

暑かったので、風が爽やかで気もちよかった。二人はベンチに座り川を見る。若い男の子が何人か集まってキャッチボールをしているので、いつもより騒がしい。文香は川と空を見て、空亜空は地面を見ていた。

空亜空は暫らく喋舌らなかつた。文香は珍しくいい気分が続くので、又歌った。胸の奥の少し右。完全にここではないというもどかしさも少しある。

文香の歌が歇むと、空亜空が顔を上げた。

「文香さん、私ってかわいいですか」

文香は首を傾げた。

「こんなこと言うの、生意気だって思われるって分ってます。でも、私、外見で評価されたくないんです。色んな人がかわいいって言ってくれますけど、じゃあ私がかわいくなかったら何の価値もないのって、同じように見てくれないのって、いつも心で叫んでます。私、変ってるんです。だから生き悪いんです」

空亜空は又視線を下げていた。ベンチの厚みを掴んで、震えている様にも見える。

文香は指先で空亜空の頬を撫でた。

「きれいだよ」

文香は笑う。

「川みたい」

空亜空ははっと目を睜いて、折れそうな文香の腰に抱き着いた。

「私、芸能人の誰に似てるとか、そういうの言われるのすごい嫌で、でも面とむかって嫌っていけない自分も嫌で、夫に愛想笑いして『そんなことないです』って言ってる自分もすごい嫌で、でも、何で嫌だったのか今分かりました。私、川の水面に映る光とか、そう言う『本当にきれいなもの』になりたかったんです。私のこと、本当に分ってくれるの文香さんだけです。『本当の私』は、いつもここにあるのに、ほかには誰も見てくれない」

ぎゅっと抱き着いて離れないので、文香は空亜空の髪を撫でた。歌を歌った。

大丈夫 大丈夫 大丈夫

鳥が一羽飛んで来て、川の面を泳いだ。川の美しくしさは増した。

工藤は空垂空に恋人がいることが分つてから話しかけなくなつた。其代りなのか、何なのか、文香に話しかけることが増えた。

「お前縷々だな。ちゃんと喰べてるのか」

「あー関根君。歌っているのは左右いうんじゃないんだな。もつと魂を込めない。君の歌には魂が籠ってない」

文香が彼の話しを聞いて、真剣に頷突くので、気を良くしたようだった。其後で多恵は言った。

「みいちゃん。あの人の話しは適当でいいんだよ、自分だって旨くないのに偉そうに言ってるだけなんだから。他の部員は誰も真面に相手しないよ、だからみいちゃんの所行くんだらうけど」

多恵の忠告にも文香は真剣に頷突いた。

文香は誰の話しても真剣に聞いた。真剣に聞いて、頷突き、自分の中に取り込もうとする。後で手に取って、嚼み砕いて、吸収しようとする。夫が最近は、できないことが増えた。相手が何を言っているのか分らない、分つても、なぜ左様なことを言うのか理解できない。魂、魂とはなんなのだろう、歌が旨い、下手、夫が何だと言うのだろう。文香は家のベッドで、天井を見て考えることが多くなつた。

春江先生は文香によく指導した。

「文香ちゃん、テンポ遅れてる」

「この場面ではお腹からわあっと声を出して」

文香は随って行こうと必死に修正した。然し、頑張っている積りでも、春江先生には足りないらしく同じ所で何度も注意を受けた。

多恵は

「みいちゃんに期待してるから厳しく言うんだよ」

と励ましてくれたが、文香は少し消耗した。

自分が、全体の中の一部になっていくような気がした。春江先生が目指している一つの「完成されたもの」があつて、其所に各が嵌め込まれていくように思えた。大袈裟に言えば、自分自身である歌を、奪われていくようにも感じられた。

合唱部員の人達は、練習が中断するきっかけになる文香に多少苛立つこともある様だったが、露骨な疎外はされなかった。文香は又歌ったが、川と、夕暮れとを、恋しく思うことが増えた。

## 二十四

ある日、工藤から言われた。

「お前はしようがねえなあ。じゃあ俺が、練習に付き合っって指導してやるよ。な？ これ以上先生に注意されたくないだろ？」

文香は先生から注意されたくないとは思わなかったが、工藤が強引に「じゃあカラオケで練習な、夫が一番捗取るから。明日、十二時、遅れるなよ。ほら携帯貸せ。番号交換してやるから。遅れたら何回でも電話するからな」と話しを進めるので、文香は怯えながら頷突いた。

工藤はなぜか二つ隣の駅を待ち合せに指定して来た。理由を訊いてもいないのに「お前と遊んでるの見られたら恥しいからな」と言う。文香にはその意味がよく分らなかったが、何か醜くさを見た様な気がして顔を顰めた。

当日、ちようどお昼に文香が駅に着くと、工藤はいなかった。すでに夏休みに這入っていて、今日は練習がない。暑かった。快晴で遮るものもなく日差が地上に降る。文香は気にいりの花柄のワンピースを着ていた。少しふくらんだ袖が可愛いらしい。文香は汗をかいた。流れる汗と、汗をかくような暑さのことを、美しいと思っ

た。工藤は五分程遅れてきた。「電車が目の前で行っちゃってさ」と詫びもせず言うので、文香は頷突く。工藤はえーと言いなながら、駅前をキョロキョロと見回した。おれの記憶では、駅前にあったと思うんだけど。記憶の確かさを主張する。見渡した限りでカラオケが見つからないので、ひとまず歩き始めた。会話は無い。工藤はあっち、あるかもと独り語らずんと歩く。工藤は文香より稍小さく、

歩幅は変らなかつたが、ペースが早いので跟いて行くのに苦勞した。五分余り暗雲に歩き回って漸やく一軒見つかつたが、満員だつた。おかしいな、なんだよ。工藤の口から何度も言葉が洩れたが、自分に向けたものには感じられなかつたので文香は反応しなかつた。

其附近にもう一軒が見つかり、其所は空いていた。工藤は「な、あつただろ」

と初めて文香のことを見て言つた。

## 二十五

部屋に這入ると、随分狭かつた。略一人用のソファがL字型に二個配置してある。ソファは所々破れている。余り明るくないせいか、壁紙が薄汚れて見える。部屋のドアが閉じた瞬間、文香は閉じ込められた気もちがした。

又ドアが閉まると、そとの音が小さくなり静けさが増した。ガラガラ声の男の人の歌がいくつもの壁や扉を通して聞える。工藤は「暑つちいな」と言いながら食事のメニューでパタパタと扇ぐ。

文香は何をしていいか分らなかつたのでじつと座っていた。工藤は落着かない様子できよろきよろした後、リモコンを手に取つた。二人が喋舌らない間も周囲の歌は届く。蝉の声も、夏の暑さも届かない部屋で文香は控えている。目の前の機械が曲を流し出した。

「よし、おれが手本を見せてやるから」

工藤はマイクを手に取り歌い始めた。曲が進むにつれ、画面の文字は色を変えながら移り変つていく。画面の文字は愛を礼賛していた。汚なくて、美しい世界のことを、変らない無償の愛のことをほめていた。工藤は元から高めの声をしてしたが、歌う時はもっと高かつた。工藤は一曲歌い終えた。

「なんだ、九十点か。もうちよつと行くと思つたけどな、最初だからこんなもんか。俺の最高は九十八点だからそろそろ百点行くと思うんだよな。この採点機能を使えば音程とかリズムが合つてるか

判定してくれるから、練習になるぞ。ほら、お前もなんか入れれば」  
画面では九十点という数字がでかどと踊っていた。夫が消える  
と、タレントらしい女の子が写って宣伝を始める。工藤は又リモコ  
ンを手に取り、曲を入力していた。入れ終えると文香の前にリモコ  
ンを置き、歌い始める。文香はリモコンを手に取った。

文香は少し前に多恵と来た時に多恵が歌っていた曲を思い出す。  
たしか君を永遠に守るか離れても一緒だよか左んなようなことを歌  
っていた。具體的にどうすれば永遠に守れるのか、離れても一緒に  
いられるのか其点に就いては触れられていないので分らなかつた  
が、メロディーを思い出すと思ひ出せた。記憶の中の音の上り下り  
を頼りに文香は曲を入力した。

工藤の歌に九十二点という点をつけ、機械は次の曲を流し始めた。  
文香は歌ったが、手に持つマイクを邪魔だなど思った。流れてくる  
音楽を、余計に思った。目を閉じてても、暗く狭い部屋にいた。

## 二十六

工藤は文香が歌っている間、聴き入っているようにも見えたが、  
機械が七十二点という点をつけると大声で笑った。

「お前、何だよこの点数、俺がこの前ふざけて歌った時でも七十  
六点だったぞ。抑揚もないし、リズムもだめだってよ。後音量だよ  
なあ声小つちええんだよだから点数出ないんだよ。やべえ面白え写  
メ撮つとこ。この機械こんな点数出せるんだあ」

文香はマイクを握った儘茫々としていた。歌っている時も、歌い  
終わった後も、昂揚や、悲しみ、怒り、喜び何も感じなかった。ど  
こで歌うのか、どう歌うのか、其違いさえ感じなかった。只歌う場  
所が違うという文で、自由を奪われた様に感じた。

呆けた文香を落込んだものと見たらしく、工藤は言った。

「まあそう落ち込むなよ、ここにいいお手本がいるんだからさ。  
今日は存分に聴いて盗んでいいぞ」

嬉々として流れた曲を歌い出す。目の前の工藤の声も、どこかの部屋から漏れ聞える声も、文香には関係のない遠くの雑音に聞えた。今回九十六点を叩き出した工藤は「今日はこんなものかなと」嬉しそうに言って、携帯電話を画面に向けた。

写真を撮られた数字が踊る、跳ねる、輝やく。

## 二十七

其翌日、合唱部の練習に出た文香は、別の息苦しさを感じた。自分はどこにいても自由に歌えないのかと思う。其息苦しさが歌に出たのか、春江先生に三度注意を受ける。

練習が終ったら、逃げるようにして川へ向った。お気に入りベンチに座る。歌おうとしたが、歌が出なかった。戸惑ったが蝉の声に気づいて、耳を澄ます。風が吹いて葉がお互いを鳴らし合う。暫らく其儘でいた。

日差が強くて、余りじっとしてはいられない。背の高い草が蔭を作っている所があり、逃げ込んだ。直下に草の上に座り、草の匂いを嗅ぐ。気もちが少しずつ落ち着いた。慎重に、歌ってみる。歌詞もないただ口遊む丈の歌が、穏やかにこぼれる。

歌えたことに安心して、二時間ほどじっとしていた。日が少し傾むいてベンチに蔭ができたのを確認して、ベンチに戻る。歌った。

くさが嫌い

苦しいから

でもどこにでも でもどこにでも

蔭が濃くなった。

振り返ると、空亜空が立っていた。

「文香さん」

悲しいような怒ったようなやり切れない顔をする。

「工藤さんときき合ってるんですか」

文香は首を傾げた。其後で、首を振る。

「すきじゃないよ」

「やっぱり！　そうですよね、あの人練習の後で女子に言い触らしてましたよ、文香さんと一緒にカラオケ行って、あいつは七十点でおれは九十六点だとかなんとか。私の友達にもいますけど、カラオケで得点をやたら気にするのに碌なのいませんよ。あんなの正確に音程出して歌えれば点数出るんだから、あんな機械で文香さんの点数は計れません。百二十点です、私に言わせたなら文香さんは。そんで工藤は三十点」

熱烈に喋舌り出す空垂空に文香は悲しい気もちで笑った。点数のことが嫌いだと言えなかった。汗が目に入り、ぎゅっと目をつぶった。

## 二十八

文香が断われないせいか、工藤が段々と図に乗ってきた。

「おい、お前」

最近の名前さえ呼ばない。他の部員にまぎれて帰ろうとする文香を、呼びとめる。

掴まると、蛭蜒自分の話しをする。もう殆んど聞いていないが、自分の歌が旨いこと、自分が日頃感じた鋭い考察、遠くで上級生の先輩が「かっこいい」とほめるのが聞えたことなどを、遠回しに言うので又時間がかかる。同じ話しも多い。「真剣に聞くからだ」と多恵は言ったが、実際は聞いてさえくれれば誰でも構わないという態度だ。

夏休みなので教室は誰もいない。音楽室は居心地が悪いらしく、態々教室へ移動したがる。遠くでは運動部の子達の声と、蝉の声とが混じり合う。文香は其方に気を取られていたが、工藤が上げた「しようがねえなあ」という一際大きな声に驚ろかされた。

「お前はほんとしようがねえなあ。しようがねえから、おれがお前とつき合ってやるよ」

文香には其意味がわからなかった。

「お前みたいな彼女、ほんとは嫌なんだけどな。お前も彼氏欲しいだろ？ 仕方ないから、おれが」

文香は咄嗟に頭を振った。

「いや」

大きな声を出した。

「いや」

工藤は少し呆然とした。其後で更に大きい声で怒鳴った。

「お前に、断わる権利なんてねえんだよ。勘違い、してんじやねえよ嫌なのはおれだよ、調子乗って断わってんじやねえよふざけんな」

其声の逆上の響きに怯えていると、一声「ふざけんな」と重ね工藤は教室を出て行った。ドアを壊れんばかりの勢いでこじ開けるので、其反動で扉が跳ね返り危うく外に出る。足音も故意と立てているのだろう音を立てて遠ざかっていく。文香は怖くて心臓の音を聞いていた。音を聞いてやって来た体育教師の増田が

「なんだ、どうした」

と訊くので、文香は訳も分らず走って逃げた。

## 二十九

多恵の家に行く。家の呼び鈴を鳴らすと、多恵の姉が出た。

「お、みいちゃん久しぶり」

軽やかに声をかけてドアを開けてくれるが、文香はおどおどと会釈した。

多恵の部屋に這入り、急いで多恵に話した。

「だからはつきり断わらないとだめだよって言ったのに」

どもりながら、懸命に話したら、多恵が呆れた様に言うので又心

臓が跳ねた。孤独が急に襲って来る。元々汗ばんでいたのか、今大量に流れ出したのか、分らなくなる。頭が茫とする程熱かった。

多恵は二、三の質問を重ね、最後は笑った。

「みいちゃんはしようがないな。みいちゃんが最後に頼れるのは私しかいないんだから、私が守ってあげるよ。まあ、そんな恥かいて又何か言ってくるとも思えないけど、一緒にいて上げる。でもあいつ最低だね。みいちゃんが断われなと思うって言って来たんだよきつと」

多恵は寧ろ上機嫌になって喋舌った。文香は、今言われた「しようがない」という言葉を考えた。私は其んなにしようがないのだろうか。何が、どうして、しようがないのだろうか。心臓の鼓動は、少し落ちついたけれど、夫でも不安な音で何度も文香の胸を小突いた。

## 三十

合唱部の練習は、夏休みの間、週に三回朝からお昼を挟んで六時間ほど練習する。夏休みが明けた九月に、県の合唱コンクールがあるため夫に向けて仕上げて行く。次の練習があったのは工藤に怒鳴られた翌々日のことだったが、工藤も文香も休まず練習に出た。

多恵は宣言通り文香の傍に居てくれた。守るといふより、さり気なく工藤が目に入らないよう間に立ってくれるという程度のことだったが、文香には有難かった。文香は工藤を見ることができなかつたし見たくなかつた。怖かった。又怒鳴られる様な気がして身を竦めた。

文香の様子に気づいた空亜空がお昼を食べながら声をかけた。

「文香さん、大丈夫ですか？ 体調悪いんじゃないですか？」

多恵はなぜか得意気に笑って「夫がね」と話し始めた。余り他に知られたくない文香は益身を縮めた。

多恵は

「だから私が守って上げてるの」

と寧ろ弾んだ声で話しを締めた。  
 箸を啣えながら話しを聞いていた空亜空は、膝に置いていた弁当を脇に置くとすつと立ち上がった。  
 目の色が冷たい。

## 三十一

空亜空は音もなく歩き始めた。多恵がふしぎそうな顔で夫を眺める。文香は目の光に圧されて声が出なかった。

合唱部員は、大抵音楽室の周りで仲の好い者同士寄り集まって昼を食べる。工藤は床に座り、一人で弁当を食べ終えた所のよう近く空亜空を見上げるとへらへらと笑った。

「空亜空ちゃんどうしたの」

言い終った直後のタイミングで、空亜空は長い手足を鞭のようにしならせて工藤の頬を張った。乾いた音が音楽室に響く。

「ふざけないですよ。誰と誰が付き合うって？ あんた鏡見て左んなことが言える訳？ 優しい文香さんがあんたに合わせて上げてることが分らない位の馬鹿な訳？ あんた他のことちゃん付けで呼ぶことが免されるレベルまで達してないでしょうが鏡見て自分を見詰め直しなさいよ馬鹿なの？ 何を基準にしたら其所迄自惚れられるの？ 彼女作りたいとか盛る前にやるべきことが山程あるでしょうが」

途中から文香が獅噛みついて抑えたが空亜空の口は止らなかつた。工藤は言葉にならない狼狽を口から洩らし頬を抑えて罵倒される。遅れて多恵が「空亜空ちゃんおちついて！ おちついて」と声をかけるが身軀を抑えることには躊躇して後ろや横に移動して口を出すのみだ。音楽室は騒然となった。

春江先生が職員室から出て「どうしたの」と場を収めようとするが空亜空の怒りが熄まず、自分で言っていて興奮したのかも一度工藤を叩こうとする。工藤は半分泣いていて夫に怯えた。文香は全

身で空亜空に抱きつきながら知られたくなかったのにと泣きたくなってきた。部員の数名で空亜空を抑えて楽になった文香は又逃げ出した。頭に何か甲高い音が響いて上手く考えることができなかった。

## 三十二

夫からの経過は、家に詫まりに來た空亜空と多恵に聞いて知った。文香が逃げて我に返った空亜空が状況を説明し、詳細を話すことは避けたそうだがとに角文香と工藤の間にもめ事があった事は部員に知れた。空亜空が「本当にごめんなさい」と深々と頭を下げた。

「私、嚇となつちやうと時々あなることがあつて、見境なく突っ走つちやうんです。もう本当になんとお詫びしてよいか」

「いや、みんな、呆氣に取られてたよね。でもこれで空亜空ちゃんに逆らう合唱部員はいないね」

多恵は場を和ませる積りで冗談を言ったらしかかったが、誰も笑えず場は寧ろ重くなった。工藤は「もう部をやめる」と喚き出したと言う。

「やめりやいいんですよ、あんな奴」

空亜空は反省しながら工藤に対しては毒吐いた。

多恵は「とに角文香ちゃんからも話しを聞きたいから、もし平気なようだったら次の練習の日、早めに職員室に來て」という春江先生からの伝言を伝えた。

帰る間際、空亜空はもう一度頭を下げた。

「本当にすいませんでした」

空亜空の小さい顔が下がって上がるのを見届け、文香は一生懸命笑った。

「ありがとう」

空亜空は驚ろいた様に目を瞠き、潤ませると、あべこべに文香を抱きしめて

「ごめんなさい」

ともう一度つぶやいた。  
手を振る二人が、少しずつ夕暮れに溶けていく。

## 三十三

ノックをしようとする、訳もなく動悸がした。自分が何かをした訳じゃないと、言い聞かせて職員室の引き戸を叩く。「はい」という声があった。

「失礼します」

文香は職員室に入った。多恵が「跟いて行こうか」と言ってくれたが、一人で行くことにした。春江先生は何か作業していた手を止め、顔を上げた。

「早くに来てもらってごめんね」

目が疲れたのか、一旦めがねを外して目の間をもむ。文香は目の前の椅子に座るよう促がされて、腰を卸す。春江先生がめがねをかけ直す。

「この前の話なんだけど」

文香は春江先生が話すのを神妙に聞いた。

「空亜空ちゃんと、工藤君から、何となく聞いたわ。まあ、こういうのは大抵喧嘩両成敗というか、なんて言うのかな、文香ちゃんもちよつと意識しすぎちゃったのよね？ まあみんなお年頃だもんね、それ自体は仕方ないことなんだけど……んー夫でね、まあ解決策の話しんだけど、文香ちゃんには彼に詫まる気があるのかな？」

文香には春江先生が何を言っているのか丸で分らなかつた。

「わたしが、ですか」

虚ろに問い掛け直すので精一杯だった。

「うん、勿論彼にも詫まってもらうけどね、ほらこういうのはしやうがないじゃない、左右やって落とし所って言うのかな？ 見つけられないとね」

「いやです」

春江先生が何を言いたいのか、言っているのか、分らないので判然はつきりしていることだけ口にする。

「いや」

春江先生は困ったように腕組みする。

「うーんでもねー彼も一寸冗談で『彼氏いる？』って訊いた丈でしよ？ 夫で『いや』って騒ぎ出すのは一寸過剰な反応じゃないのかなあと先生は思うのね。元々、二人仲好くてお互い話し懸けたりしてた訳でしよ？ 年齢も年齢だから、夫くらいの質問当り前だと思うのね、まあ彼も唐突すぎたかもしれないけど」

文香は突然頭を殴られたようにくらくらした。春江先生の言葉が、益頭ますますに這入はいらなくなる。

### 三十四

「それ、は、あの人が言ってたんですか」

言う文香に春江先生は頷突うなずいた。

「そう、工藤君ね、夫でね、工藤君、部活退めるって言い出してるのよ。私としては、貴重な男子部員だし、コンクールも近いし、こんな事で和を乱したくないのね。だから、二人が、仲直りしてくれば夫が一番みんなに取って好いことだと思っただけ、どう？ 仲直りできる？」

春江先生は文香の顔を覗き込もうとした。文香は俯向うつむいて痛い程拳を握っていた。

「いやです」

唯一浮んだ言葉を、息の根を止めるように絞り出す。

「そっかー困ったなー、実は工藤君もね、文香ちゃんから詫まって来たら自分も詫まるって言ってる、お互い意地になっちゃってる丈じゃないのかな。どうせいつか仲直りするなら、今してしまっただ方がいいように思うけど、どう？ 仲直りできない？」

文香が痺れた頭で考えたのは、先生が場を収めることしか考えて

いないだろうことだった。「いつか」も「仲直り」も、意味が分らない、理解できない、ただ、嫌悪の念文がどす黝く膨れ上っていく。「やめます」辛うじて言った。

「私がやめます」

春江先生は寧ろ明るかった。

「そっかー残念だなあせつかく這入ってくれたのに。でも、二人は同じ学年だから、私から工藤君にも能く言っておくからね、もし、次いつか話す機会があったら今度のことは忘れなきやだめよ。怒りは何も生まないんだから。文香ちゃん、歌うのが好きなんだから、もし心の整理がいたらいつ戻って来てくれてもいいからね。其時は私も協力するから。じゃあ、ごめんね、朝からわざわざ来てくれてありがとう」

文香は握った拳が離れない儘立ち上って、頭を下げた。「ありがとうございました」言った後で、思い出した様に春江先生が言う。

「左う言えば、私、文香ちゃんには厳しく当たってたように感じちゃったかもしれないけど、あれは文香ちゃんに見込みがあったからよ。文香ちゃん、歌うの好きな気もち、忘れないでね。夫が一番大事なんだから」

春江先生は握り拳を軽く振って文香を応援してくれた。文香は聞いた事があった。他の部員が先生に

「先生、なんで関根さんに厳しいんですか」

と訊いたことがあったのを。

「あの子、声が浮いてるのよね。何度言っても直らないの」

文香は呻いたが、身軀を折り曲げて声を押し隠した。深々としたお辞儀は、醜くいものを見えなくさせて、又元に戻る。

### 三十五

「あああああ」

文香は布団を頭まで被り、思い切り叫んだ。憎しみを、怒りを、喉

から追い出そうとする。破れよと許りに布団に爪を立てた。枕元にある目覚し時計を、壁に叩き付けようとして、違うと直前で思い留まる。ものに当たって、凡てが壊れても、憎しみが出て行く訳じゃない。思ったが堰かれた憎しみは愈募った。

憎しみが頭で暴れ回る。何が、憎いのかさえ、分らない。

室の扉が、ガチャリと披いた。母だった。

「文香……？」

怯えた様に声をかける。

「どうしたの」

母は恐る恐る近付いて文香のベッドに腰を掛けた。文香は布団に隠れて獣のようだ。

「お母さん」

文香は母に縋り付いた。

「正しいって、何。きれいなものは、どこにあるの。嘘を言えば、は、ばれなければ本当なの。誰が正しいの。何が正しいの。怒りって何。何も生まないの、怒っちゃいけないの？ 正しいものはどこにあるの。嘘って何。正しいものって、見ただけじゃ、わからないの。どうしてわかるようにできていないの」

母は笑いもせず悲しそうな顔をした。母にこんな顔をさせているのは自分なのだと思うと、頭がぎゅっと締まった。母は文香のことを抱き締めた。

「文香、悩んでるのね。大丈夫、その答えはいつかきつと見つかるから。焦らず探すのよ。大丈夫、大丈夫よ」

母の胸で文香は呻いた。違う！ 違う、其んな答えが欲しいんじゃない、いつかじゃ足りない、どうして大人は「いつか」の話をする？ 足りない、足りない、正しさのことを、美しくしさのことを、知りたい。

此世界のどこに美しいものがある？

美しいのは、自然の、世界のことだ、人間のことじゃない。人間は醜くい憎い一つも正しくない。世界の、代りに、人間は到底な

れない。  
 夫でも文香は母に縋って泣いた。母は、辛抱強く文香の背中をさすった。  
 最後にはさする音と、寝息だけが残る。

## 三十六

文香が合唱部を退めて数日経ったある夜、多恵と空亜空が連れ立ってやって来た。

二人はニコニコしている。

「夏祭り行かない？」

文香は忘れていたが、言われて近所の公園で夏祭りがあることを思い出した。

私服に着替えて出ると、空亜空はここに来て初めての夏祭りだと躁然いだ。多恵も、私達は毎年来てるよねと一緒に躁然ぐ。文香は真剣に聞いてうんうんと頷く。誰も合唱部の話しは出さない。

遠くからでも、太鼓の振動を感じた。盆踊りの音楽も聞える。幾何も釣られた提灯を見て、文香は毎年抱く昂揚を思い出す。音楽や、食べ物、祭り全體の雰囲気への昂揚を、丹念に掘り起そうとする。

もう暗くなり始めていた。公園に着くと、櫓、櫓から縦横に延びる提灯、立ち並ぶ出店の明りで眩しい程だった。人は其所中に溢れている。大人、こども、男、女、問わず浴衣だったり、洋服だったり、多くの種類の人がいる。大声で客を呼ぶ出店の人、其前で騒ぐ若者達、音楽に合せ踊るおじさん、おばさん、其間を縫うように駆け回るこども達。

其どれもが醜く見えた。文香は戸惑った。自分も興奮した、其一部だった人いきれ、声、人工的な提灯の明り、凡て、去年とは別のものが用意されたようだった。

「みいちゃん」

文香を呼んで多恵が笑う。多恵の笑顔は変わらない。自分だけなの

かと思った。多恵は此違和感を感じていないのかと思った。

「文香さん」

空亜空は射的の銃をもって文香に笑い掛け、器用にぬいぐるみを取って嬉しそうに声を上げる。

文香は深呼吸をした。口の中で、歌う。大丈夫。自分に言いきかせた。寧ろ目を披いてよく見た。大丈夫。何も変らない。

たしかに何も変らなかった。見た目には何も変らない、興奮や、魅力を伴う立体感が抜けた、扁平な景色だけが其所にあった。記憶の中の景色と夫は一致した。然し一致することにより、自分は、此場所にいて興奮したことがあっただろうかと言う疑がいても生れた。

「多恵ちゃん」

誰かが多恵を呼んだ。

### 三十七

三人で振り向くと、合唱部の女子五人が寄り集まっていた。

「多恵ちゃんも来てたんだねー」

「言ってくれば誘ったのに」

「空亜空ちゃんそのぬいぐるみ可愛いー今取ったの？」

五人は文香達三人を囲んで嬌声を上げた。多恵は躁然いだ様子でみんなと話し、空亜空は取り急ぎ莞然と笑い、文香は一人でいた。

明らかに疎外された訳ではないが、誰も文香に話し懸けなかった。

五人は一通り盛り上がると「またね」と手を振った。其中の一人がちらりと文香を見た。冷たい目だった。文香は喉笛を攫まれた。

息が、できない。当然だと思った。自分は突然合唱部に来て和を乱し突然合唱部から去った。何の為に来たのか、分からない。「あの子、声が浮いてるのよね」春江先生の声を思い出した。自分が、他から醜くく思われていたらと、初めて考えた。

「あああああ」

文香は直立した儘叫んだ。夫程大きい声ではなかったが、周囲に

いた何人かは文香を見た。多恵と空亜空は驚ろいていた。醜くい人と醜くい私。文香は死にたいと思った、消えたいと思った。消えたいと思って走り出した。どこへ行くかは分らない。川が浮んだ。凡てを呑み込んで流れそうな、暗い夜の川。

攫まれた筈の喉を攫んだ。攫むのは自分の手丈だった。息ができなかつた筈の喉は空気を通し、攫むと血液が押し返す。

## 三十八

月が輝やいていた。殆んど欠けていない月は、吸い込まれそうな美しくさで、夜に浮んでいた。遮切る雲はない。星は、いくつかしか見えない。照明が邪魔だ。壊して歩くには、数が多すぎる。

夜は蟬も眠っていた。代りに、鈴虫がもう鳴いている。美しい歌う声。美しい夜の月。自分だけが醜くかった。走った所為で、息が乱れている。美しい虫の歌を乱す。呼吸を止めたかった。両手で喉を締めると、苦しくて、咳き込んだ。膝を突き、手を突くと唾が毀れる。唾を吐いた。土に滲みた。

川は、音もなく流れて、少しだけ照明に照らされる。黒い。どうして、自分は此世界の一部になれないのだろうと思った。美しいものになりたい。夫が無理なら、美しく生きていたい。所が実際は只醜くい丈だった。只醜くい自分がいた。醜くい人間が免せない。だから自分も免せない。文香は歌った。

死ぬか殺す

どっち

どっちがいいの

憎むわ

人を

死ねよ

詫びる

私に人よ詫びる詫まり尽せ  
すぐに私の番が来る

ガサリという音がした。空亜空だった。

三十九

「文香さん」

空亜空は左右一言々うと、土の上に手を突いていた文香を立たせ、膝に付いていた砂を払った。すぐそばにあるベンチに座らせる。文香の手を握って、文香のことを真面から見るが、文香はふらふらと据りの悪い首で川を見つめる。

空亜空は静かに言った。

「文香さん、私、私も、合唱部やめようと思います。コンクールまでは、迷惑になってしまうのでいますけど、其後はすぐにやめます。文香さんと一緒です。文香さん、私は、文香さんの味方です何があっても、誰が何て言っても。ここで文香さんの歌を聞いた時から、私は文香さんの理解者だって、そう思っています。文香さん、今の歌聞きました、つらかったですね、苦しかったですね、いいんです其まんま歌っても。寧ろ、心の暗が率直に表わされていて、テレビで見るようなアイドルの歌よりずっと素敵です。魅力的です、文香さん、歌って下さい好きなように、思ったように」

文香は空亜空の言葉を最後まで聞くと、川から空亜空へ目を移した。段々と焦点があって空亜空の端正な顔が見えると、突然笑い声が噴き出した。甲高い声で噓せるまで笑う、噓せても猶笑う。空亜空は茫然としていた。

「心の暗、そんなの、知らないよ。朝と夜があるだけだよ、どこに行っても。私は、夜だけ好きな訳じゃない、朝の光りにもなりた

いんだ。醜みにくいだけの人は、嫌だ、嫌だ、きれいになりたい、光り  
 になりたい、今は夜しかない、暗くて、見えない、苦しいよ」突然  
 息がとまった。苦しい。「苦しいよ」涙が出てくる。「どうして」  
 空そ空あはそつと文ふ香かを抱だき締しめた。首に両腕を回して、頬あを合あせ  
 る。涙が、自分の頬から、空そ空あの頬に移っていくような気がした。  
 泣き声と、呻うめく声、鼻をすする音は聞き苦しく、夫それでも虫の歌声  
 と調和した。

## 四十

多た恵えが、気を遣つかい、買い物へ行こうと誘ってくれた。此頃このごろの文ふ香か  
 は、常に茫ぼうとしていて、どこを見ているのかわからない。一人でいる  
 時は、発ほ作つを起おした様に、突然胸を搔かき筆むる。其所そのせ為いで胸が赤くな  
 っていた。気入りのワンピースを着た時、痛々しく赤らむ胸元が  
 見えて、多た恵えが気遣きづわしげに視線あを合あしたり外はずしたりした。  
 多た恵えは母から文ふ香かを連れ出だしてやってくれないかと頼たまれたら  
 かった。

「三時まで部活だから、ちよつと待ってて」

多た恵えに言われた文ふ香かは、制服を着て学校まで迎えに来た。部活が  
 終おるにはまだ時間があるし、音楽室で待つ訳にもいかなないので、ふ  
 らふらと校内を歩いた。

日差ひが特別強い日だった。文ふ香かはすぐに汗をかいた。いくつも重  
 なる蝉せの合唱あが、又また暑さを搔かき立たてる。文ふ香かは日差ひを避さけるために  
 体育館へ這はい入いった。今日は活動がないらしく、誰もいない体育館は  
 寂しんとして別の世界のようだ。床に座ると冷ひやりとして気もちがいい。  
 壁を通して伝わる蝉せの声は、又また別の美うくしさがあつた。

文ふ香かは夢を見ているように、茫ぼうとして小声で歌を歌った。途中で、  
 自分の醜みにくさを思い出し胸を搔かく。ひりひりと痛んだ。夫それでも、落  
 ちつくと又また小聲で歌を歌った。最近はどこで歌っているのかも、ど  
 う歌っているのかも、分わからない。胸の中が空くう洞どうで、其その虚うつろから糸わか

に歌が生れる。其響きも空しいものだった。

「暑いなあ」

無粋な声と俱に、体育館の鉄の引き戸が重く開いた。体育教師の増田だった。手に持っているボードで、自分を扇ぎながら入ってくる。文香は茫とした儘彼を眺めた。

#### 四十一

増田は文香から五メートルほど離れた位地にどかりと腰を卸した。扇ぐのもやめず、あぐらをかく。文香は視線を戻して又小声で歌った。文香の歌よりも、蟬の声の方が強く響いた。

「お前歌うまいな」

歌いやむと増田がほめた。文香は又茫と増田に顔を向ける。反応しない文香に頓着なく増田は喋舌る。

「制服着てどうした。部活はいいのか」

文香は自分の制服を見て、顔を戻すと、ゆっくり喋舌った。

「やめました」

「そうか」

増田は特に興味のない様子で答えた。

「おれはさ、バレー部の顧問なんだけど、うち弱いんだよなあ。覇気がないっていうのかな、まあ自分の時代と比べてるだけなんだけど、おれが学生ん時はもっとやる気あったんだけどなあ、部活終っても自主練してへトへトになってさ、まあ強い学校はほんと強いし、生徒の目の色も違うし、単におれの指導力不足か。そうだな」

増田は一人で喋舌って一人で話しを終わらせた。文香はふしぎそうに増田を見ている。増田は恥しそうにガリガリと頭を掻いた。

「関根、お前はあちこちで見えるなあ、大丈夫なのか」

質問が漠然としていて何の事なのか分らない。文香はほんの少し首を傾げるが、増田は夫以上掘り下げようともせず体育館の窓を見ている。文香は

「先生」  
と逆に増田ますだに問い掛けた。

## 四十二

「正しいって何ですか」

増田ますだは面喰めんくらったように文香ふみかを見た。

「嘘は、悪いことは、いつかばれて、罰ばちが当たあたりますか。正しいことをすれば、いつか、いいことが起おこりますか」

増田ますだはガリガリと頭を搔かいた。

「難しいこときくなあ。おれは見ての通り頭悪いんだよ。体力だけでやってきたからなあ、だから、あんまり、いい事言えないけどいいか」

文香ふみかはゆっくり額突うなずいた。増田ますだは又窓またを見た。

「おれは娘が小学生の時離婚しててさあ、最初は、月に一回ぐらい会ってたんだけど、娘が中学生になってから段々会わなくなったんだ。娘が嫌がってんじやないかって、思っちゃまったんだな元嫁さんもその頃再婚したし。今は高校生だろうなあ、お前おとみたいな大人なしい子だったよ。もう三年会ってない。

「数えてんだよなあおれも、なら会いに行けばいいのに、勇氣もないしなあ年頃の娘だと思つと、嫌なんじやないかって考えちゃうんだよな、おれいい父親じやなかったし。でももしも会えた時のことも考えるんだよ、おれは、いい父親じやなかったけど、だから、いつ会っても娘から見下されるような人間にはなりたくないって、夫それがぎりぎりの、おれに取とつての正しいことかな。お前おとが求めてる答えはこういうことじやねえと思うけど。

「生徒に言うことじやねえけどおれ元々事なかれ主義だから、本当は面倒に係かかわりたくないんだよ、揉もめ事ごとなんて御免ごめんだし。でも、教師だからさ、夫それで放つといたらおれ恥はずかしい人間じやねえかって、娘に会えないじゃねえかって、今会えないんだけど考えるんだよな、

そう考えなきや動けないんだからおれは正しい人間ではないんだろ  
うな、夫それにしたっていつも思ってる訳じゃない、面倒事だから係かかわ  
らなかつた事あるよ、正直に言うけど。

「本当は生徒にこんなこと言うべきじゃないかもしれなくて、  
正しいことしたっていい事何も無いんだよ。教える時は、いい事を  
したら報いがある、誰かが見ていてくれる、悪い事はばれる、其その罰  
はいつか必かならず下くだるって言うけどさ、四十年生きてきて思うのは本  
とかねえってことだよな。正直に言うとき、いいことしたらすぐ報  
われて欲しいじゃん、悪い事したらすぐ罰あたが当あたって欲しいじゃん、  
左そうすればみんな正しく生きるよな。でもなあ、悪い事したら夫それ  
に見合う丈だけの罰があるかどうかさえ怪しいんだよな、人殺して何年  
も懲ちやうえきくわ役喰くわって夫それで終おわりなのって、まあ出た後にも色々苦難がある  
だろうけど思うよ、其その後其そいつ奴やつらのうのうと生きるんじゃないかって、  
思うよ。

「正しいことをしたことの褒美ほうびなんてないんだよ。褒美ほうびを求めな  
いのが正しいことなのかな、其そこ所こは分わかんねえけど、正しいことは人  
目に付きづらいから、誰にも見てもらえないし後でいいことが返っ  
てくる訳でもないし自分で『おれはいいことしたぞ』って満足があ  
るだけなんだよな、後でいいことあっても、夫それは正しいこととは別  
のことだよ、セットだって考えない方がいい。何なんか話はなしずれてきた  
けど、お前は」

増田ますだは文香ふみかを見た。

「もしそうでも、いいことなんか何もなくても、夫それでもお前は正  
しいことをするのかって、左そういうことだと思ふよ、正しいっての  
は」

文香ふみかは呼吸を忘れて増田ますだを見つめた。目が開ひらく。暫しばらくして漸ようや  
く息を吐くと、増田ますだは又窓またを見た。

「すまん、訳分わけわかんなかつたな」

蝉せみの声が聞え始める。文香ふみかは、今の時間、別の世界にいたことに  
気づいた。

夏休みが終つて、新学期が始まった。依然として暑い。合唱部は県のコンクールに出場し、銅賞を得たということだった。空亜空は合唱部を退めた。

多恵と一緒に帰ると、頻りに今嵌入っているアイドルの話をした。塾の講師で、一時期熱を上げていた諸星という先生に、彼女がいることが発覚したらしく、其話しは最近聞かない。文香は其アイドルの魅力について、真剣に聞き領突いた。

二人とも一度家に帰り、着替えると、文香は先に一人川に向つた。青空には、雲が浮んでいて、美しい。文香は川べりで暫らく空を見上げていた。

お気に入りのベンチのそばには、食べ終えたビニールのパンの袋が落ちていた。醜くいものを見て、憎しみを覚える。拾つて、座り、両手で袋をもつた。

くしゃくしゃと袋をмонで、又空を見た。川にも目を移すと、光が反射して光り輝やいている。光りがさすけど、光っているのは私じゃない。文香は小さく歌を歌つた。

ごみ拾いをするおじさんが歩いて来た。長いトングを持って、もう片方の手で持つ大きいごみ袋に落ちているゴミを入れる。市の清掃員の格好をしていた。おじさんは文香と目が合うと、文香の手許を見て、袋を差し出す。

「捨てる？」

文香は袋を捨て、一生懸命笑うと、深く頭を下げた。

「ありがとうございます」

おじさんは照れくさそうに「おう」と笑つて又歩いて行つた。

又空を見上げると、いつ来たのか飛行機雲が残っていた。何か美しくくないものを見た気がして、憎しみが湧いたが、夫と是とは別だとも思う。

声こゑが糸いとかに聞きえて振ふり返かへると、笑わらった空そら亜あ空からが手てを振ふってこちこら  
に向むっている。多た恵えも一いっ緒しょにいてゆゆつくりと歩あく。文ふ香みは立たち上あつ  
た。

空そらと、川かわに向むかって、静しずかに歌うう。